837
34
48

幾之部

七

国立国会図書館　タイトル『和訓栞』　請求記号 837-48

ガラス使用

837-48

曹山文庫

同津　谷川士清　纂

根岸信蒲氏寄贈

昭和六年　帝國圖書館藏

幾の部

き　陽神の稱よ多くいふ伊奘諾湯頼那藝神魯役九郎皆みな財
くいふ○生をもむいふ略生酒生絹なども九郎見し菓食よ生料熟
料あるいふ生酒ハ水の雜らぬをいふ西土よも此称ありう生絹ハ練熟を
をいふ○樹本をもむも生れ茂はまく始義をいふ○まをもむ
も氣(キ)もうもうもう祢代紀よ赴もあり○結語よことをいふハけり反音り
末をもうもむよ茂因し古今集よ茂てかあるを物をもう初てもを見をも
れをもひをもれをも因し○俗語よ伯父をもをいふハをもれ略なり
物語よをもをもあるをいふをもれなるをもれ名みをもれをもるくいふ紅
なり○着ハをもれ畧を○服をもをもむを茂よ同し○材ハ本よ同し祢
代紀よ八咫鏡今方なるを角をもを圓なるをもまるをもをいふ○棺をもむハ木
の茂を西土よ柩木の酒なり○茂因し刻をもむハをもれ略なり

○すとゝむハ日本紀よんでとう刻よかゝとう馬れとけよ幾すなゝ也とう河
紀年よんゆ○葱をゝむハ氣れ氣と根葱分葱刈葱なゝ稱とう根葱
正へくゝて採べく刈て用うへきれ名ゝ○牙ハきゝれ略猪れゝ象れゝ
なゝといふ見なり○城をゝむハ築れ略なゝへゝ又垣れ略ゝ也日本紀玉城
宮と古事紀ハ玉垣宮ハ作ゝり説文ハ城以盛民也とんゆ柵も同ゝ日
本紀ハよんでゝう○杵をゝむも搗れ畧ゝ也○黄ハ色ハいゝくゝち反さな
ゝハ草木黄落れゝゝも参河国刈ゝ谷ゝ也ゝふゝゝあいとゝハ五ゝれハ語皆い
ゝけていゝゝうゝいハゝれ略なゝへゝ○又をゝとゝゝる古語多ゝ○酒を
いゝゝ氣れ氣も御酒白酒黒酒れ彩ゝ○季れ作淳陸とゝ也春秋
二季を指て也ゝ○倭名抄ハ綺俗云岐と見て源氏ゝも綺を音ゝて
いゝかんや紙ハかゝれゝをゝゝゝゝゝ○信濃ハゝゝれ藥ハ藥
なゝゝゝハ据て法を流けをゝふゝゝハ機字れ也ゝ○琴れ徽ハ金玉を
用ゝゝ蚌徽を貴ふものハ蚌ハ光彩なりゝ月光をゝて相射ゝゆゝ
なりと洞天清録ハ見ゝゝうゝれと琴賦ハ徽以鍾山之玉とんゆ

△ゝゝの
△さい　日本紀ハ本をゝゝありハ音れひゝゝ加へゝ○紀伊ハをゝ本ゝ
ゝゝゝ和泉年号ハ好字と指ゝ二字をゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
△伊ハ紀の音れ音なり○光仁紀ハ天下氏姓青衣為采女耳中為紀と
みゆ耳中れ氣詳なゝれ
△ゝゝゝ　杵奇れ氣ゝ礼記ハ相をゝあり注ハ相謂送杵聲とんゝゝり
△ゝゝゝ　消をゝあり之ゝ又ゆゝ霜雪露滴れ氣ゝゝゝゝゝゝゝゝ
かへゝゝとゝハ強くゝふ辞消ゝゝハ帰ゝゝ也加へゝ
△きゝり　本居れ氣新古帖ハ本折ハゝれゝゝゝ
ゝゝゝれぬ氣ハゝゝ嫁ゝなく紫れゝゝゝハ人と注やゝゝゝん
△さかひ　祝詞ハ錯を古語云伎加比とんゝゝり桁梁なゝれゝちひれ氣ゝゝ
きかふ　日本紀ハ柵養とんゝゝり俗因れ氣を柵れ中ハ吉垂ゝゝゝゝゝ
ゝゝ○をゝれ郡名城国も同ゝ
さかりぎめ　続世法ハ神れ社の莫かりきゝゝれ作なゝゝゝへれ氣れゝゝ

屋し小野なりしかの源氏うゐかうの君業を
ものしたまへるに白き事ハかうべよりなりなと
ものしたまへる衣服令ハ無位黄袍といひて庶人も同し謡ハ黄服ハ者という
△ちぐす　雉ぞいふ日本紀ハちぐしとも雉とも昭和とする説
白し○孝徳天皇紀ハ白雉を献ぜり祥瑞ハ代其政を
賞するなり和泉中ハ但馬国ハ献せり○ちつるかけハ野
洲名ちぐしと日本紀ハちつるハ雉ぞ野雞と称するなり
ちぐしとも　神代紀ハ国栖をちぐしとあり
かくいふなり今也ちつるなり
ちぐしむめく　聽堂をちぐしとあり荘子ハ疏ハ聽堂ハ疑惑不明之見とあり
△きく　聽聞をいふ来ハ許をきくといひ許をきくへし許をきくハ
かぬといふなり書ハ聽之不聽をとりてきくて聽をゆるし
ともあり不可をきかぬともあり○国をきく
きくてといふハきくて又きくてのきくてとあり

茶ハ效驗ありてきくといひ釘ハ徹底するをきくといふ都も国ハ名をきく入
るる事ハ答ふへしきくとも聞ふ○鼻ハ用ハ嗅也きくと香なり
にきくといふ楞厳経詩注疏ありたるきくと易牙善聞味とふ
ロうまきをきくハ名匠野馳倭ハ聞とかくとあり口語ハ国さ
ロきくなきくハ身ハ就てきくハ用ハ聞とも○聞物部
日本紀ハ豊前企救郡也舊事紀ハ規矩ハ作る後醍醐帝ハ時
規矩高政なり○菊ハ菊理姫菊池郡なと也新
撰字鏡倭名鈔ハ和名ハ我ハ好ハ奇ハ音を菊とあり○倭ハ
也ハ白書蘇芳也ハ○菊を
延暦十六年ハ御製ありて源氏太上天皇重陽菊花賦経國集ハ
載ハ寛平ハ時菊合ハ始ひしかりなるくなりしと也ハ続古
今集ハ聖武天皇ハ菊花ハ奇ハ称されるハいぶかしくて○該
ハ楚辞ハ梅なく方ハ菊ハ菊なりしと也ハ海水尾章ハ御製
○なるハ也ハ擬ハ也ハ小菊ハ也ハ也ハ梅ハ也ハ

○梅と菊と酒とよつて酒ハ行平中納言ハ須磨の野に梅と菊と
あるを行平ハ奇とす
長谷川の酒屋ハ山里にして秋毎に菊を採て酒とす人
千里とも見るべしいとん秋毎に菊を採て酒とす人
○菊と花の菊と梅とハ梅を花ハ兄と梅ハ弟へてゐる菊ハ
万葉に後ろ〻ハ花ゆゑ〻ハ花ハ花ハ○菊ハ名
を東坡詩に本草に重陽を菊ハ名なり菊歌文に菊ハ名
菊ハ菊ハ八月五日に菊ハ村上帝ハ菊ハ好む西宮記に菊ハ類聚國
史延暦十六年十月癸亥曲宴酒酣皇帝歌曰
こゝろ〻ハ花ハ毎に菊ハ花ハ
後拾遺集
めもかるゝ花ハ菊ハ花ハ
元稹詩に不是花中偏愛菊此花開後更無花と○ひと
ゝぶ〻ハ勅撰集物名に菊ハ後撰に一本菊ハ

菊ハ別種○椒房ハ春白花ハ菊ハ○菊ハ種多し
いと単瓣重瓣有心無心旋心佛頭蜂窠ハ七品を
近年一株に五色を接ぎ
○伊勢物語に菊ハ
紅白ハ白雪ハ梅ハ
白菊ハ衰へて其英ハ
かゝる也と○ハ草ハ苦薏
群芳譜に菊與薏有兩種苦薏一名野菊
ハ倭ハ馬蘭一名紫菊ハ嫩葉を
○源氏に菊ハ齢を延る事を奇ハ風俗通に
南陽ハ甘谷ハ事に仙書に延壽客と月令廣義に
菊ハ菊ハ下に○本草に据ハ南陽ハ菊黄白表裏
蒙筌に月令獨于菊曰黄花取其得時之正況當其候田野山側盛開
滿眼皆黄花也と我邦山野自生ハ者ハ皆白花を○

湯に斗米をつかふ事とあるハ賈長房の菊酒に故事ありしなどとあり續齊諧記に詳也風雅集

万代を祈むとつかふ菊花長月に咲ふるかなかなり

○菊ハ大やうこぶとつくるに花の色ハ白と赤とあるもいろいろ桓武の御製伊勢物語にとゝ見もちるとゝあり楚辭にも冬餐秋菊之落英とあるこゝ

古へよりある物ハ今に野菊なるへしとあり○夏菊ハ寒菊ハ大小中の品判然なり

くらげ　木耳をいふ木水母に象る倭名鈔に蕈をしてくらげと訓

やり梗又桙も同し接骨木に出るを賞す

くぢん　麴塵と書て礼月令注に出る東帯色目に青色と号をくぢんに染に藍に紫袍に多ハいふ紋黄櫨に同し上皇皇太子ハ

くぢんに親王公卿侍臣六位已上野に行幸に時に用て用古例あし

麴を菓に同しく菓をくぢんとやり黄櫨染に縁をるを云なり

餅抄にくぢんるハ誤なりと云へ沒雲圖抄をくぢんくぢん

くぢんぬ　菊水に音也荆州記に酈縣北有菊水云々楠正成に旗に紋に用るハ其先橘諸兄公堰手に任し玉川の山水を愛して直蜜に水流と山吹を繡にせりとゝ家紋とやり菊ハ誤なりとゝ○美濃に菊水ハ醴泉に故趾也○小陶器にもあるに花のうち掬水也虞裕談撰にくぢんとあり

○菊川ハ遠江也中納言家行に承久三年に宿に相模に出つけしまふ昔南陽縣之菊水汲下流延齢今東海道之菊川宿西岸失命太子に光親卿と共に遊ひ後基に参にもて白に附はよりて菊に沈を

相模に一首に秋を宿に相模に出るに

くぢんぬかなかなに菊に流れ沉めん

明年鎌倉葛原岡に殺さる

くぢんぬ　後撰集源氏物語にくぢんぬ九月九日にあるに事とゝ

わくらはに　万葉集に七月に彼岸に九月九日に大風にかゝりまゐるとゝ

秋にそなる九月に九日に五六に菊に花を咲とゝ

一条兼良公に説に綿を菊に事に

雪ふれはまつは寒雪を陽とうたはれたるとこそ侍るとかうの一書は菊屋
ともいふ今は菊花を色綿とかとて花を造り陰陽師大黒うり歌ろと
ろかうの歌は菊花あるを称せり梅軍家中行事略は軍編をこそ
芳たまふ時唱へこそうの歌なり所とそ
ぬまてるすの山の花の菊花の露よりいとそう歌あるへんん
新勅撰第五菊わかをかひて老ぬるひとをかとそうこそう
△さごろも　本毎は梅をかりひとをこそうへひとへ山風と嵐といふんれおるり
西土にも宜将愁字作秋心とも作るとそうこそ古今集
雪ふるは本毎はをうゆるはいつるを梅とこそ作るし
ことしめす　日本紀は御字又所御又聞字をみ又附けるみるも
とり續日本紀は国紀とこそうり古事記祝詞式なとは国看と也方家
集は所国見為とそうこしとさめしとみ物語し崇むう
詞は自ら言ふも能聞得思得は活とそうとしとり国しめる国語
とひとしとり日本紀は不聽とこそうめ特とこそうり鄙俗こそめとと

いふは略注なり
きこし　饗を　聞食は家方家集はこの国とかけり和しは聽と国とかり
国と和と看と食と皆通へり
△ささ　倭名鈔は標をささめり木文也と注を今いふ木目也刻むは義
名しの蚶といふは貝は文をそ名とかり今赤貝といふ肉はあるを所れ
きさがいる蚶潟なへし蚶満寺は風土記は延喜式は蚶方と事
せり風土記和歌浦は似うり幾千万も相あるをそ赤貝という
○殼をそうはうをそて狐と避るを青はひるを月は青はうく似られはなり○
象をそうむは牙は標は似るる文あれは称せるなへし梵語は伽耶とふも迦
坂小松院應永十五年は南蛮より黒象を献せり享保十三年は蛮船は
を牝牡二象を貢を三歳とは象とあり白象
入まり毛法蘭とかりを院沙制
はもはさは時らそとはつめそはをむるをそはをはをを
○象山象小川は吉野山は角なり

きさき　皇后をかきの君幸ぎ也とより新撰字鏡に媿とあり妃
也と注せり古へ神代に伝ハ尊き天皇に准らへ皇祖とやせる故にそこ妻
伝后と称とせ雲風記に阿遲須枳高日子命之后天御梶日女
命の故に○皇后紀に諱ハ音を讀と台記に見えたり○職原鈔に中宮
者即皇后也本朝並置二宮太充其謂とて又光仁紀朝に中職と置
て桓武紀皇太夫人紀義とより又文武紀夫人ハ聖武紀皇太后にて孝謙紀太后と
史に中宮とせり○きさきがねの后なりなるべき故いふなり○二代紀后
と称しるハ平家物語嘉喜記にも見えたり藤原氏多子也近衛帝紀時
入て女御となり二条帝紀時又皇后に立たりて大日本史に納太皇太
后藤原氏為皇后とせるハ其上奏をもるなるべし天子无父母紀放言
也し時ふるやいひそめよりん
ここざし　神代紀に牙とあり氣指紀に生機とあり牙ハ芽と同し
機もうみ萌も訓せり皇代紀に兆もうみ
ここざし　二月とあり氣更に春紀陽春紀遠とあり時に○二月二日

を奴婢紀交替と宮あるハ雲嶠類要に秦人生二子惡之乞與隣家大
富貴本家貧後以二月二日取帰後復富隣家乃貧といふ故事
ひとへしとより
もさ　日本紀に私部とあり今紀氏に私市に作る前漢服虔注
に私官皇后之官とえんとより訓義也
△ふち　岸とあり水涯といふ際石紀に研とあり日本紀に研
岸と家屋とあり○かたとき　きり称ふたつとなるとみ新撰字鏡に
墟とあり
雉　雉といひさす反じ也こでしに略也て顕昭とより○春山人野と
燒て火の雉紀卵を伏紀なるよ訓んとして雌まづ翔と張て仰て地り
伏を雄数卵を含を為て雌紀翔紀間に乗て後に雄雌紀鳴紀啣
て毛に引去て無ハ知らしさ人にかくるよ首を義して尾と
顕宗紀ハ為て人紀形を隠を迹を蔽を姿を雄紀為むるに潜るに
喻ふるに○續日本紀に飄風折樹に化為雉とえんとより○夏小正に

雉震呴とゝ伯耆風土記に震動之時鷄雉悚懼則鳴踰嶺谷一郎樹羽蹬踊也とゝ倭名抄に音合せとゝ月令に雉入大水為蜃とゝ本草に見ハ蛟蜃なし○禁裡正月に式に雉に羽盞あり

△ゝ　倭名鈔に碾とゝ研に同し嵐あれとゝ沖とゝ同し○嵐とゝ小嵐とゝ也○礒打波とゝ也

△ゝ　日本紀に蹴とゝ蹴とゝ車とゝ沖とゝ同し○嵐とゝ小碾に同し○嵐とゝ小碾に同し

△ゝ　神代紀に瑕字又痍字とゝ斬窠に見へし痛も疵も同し○玉に瑕或ハ玷といふ新撰字鏡に玦とゝ世諺にいふ文選に玉巵無當雖寶非用に淮南子に璜に考字珠に類字用てゝ○世に婦人の淫行をゝといふ普曜経に耶輸

守節無瑕とゝ○沖とゝ人多くゝ

漢書に吹毛求疵とゝ

△ゝ　李象物に東瑠璃とゝ義勢とゝ今ゝ

ゝ　着背長に腹巻腹当とゝ

ゝ故也とゝ沖とゝ一物にて主位に称とゝ

ゝ事大系記とゝ

△きぞ　那日に古語とゝ系統に見とゝ

去年とゝ

ゝ　競字とゝ息沖に同し

ゝ　競猟也万葉に茱猟と同し○端午日競採百華とゝ荆楚歳時記とゝ

△ゝ　北ハ本に義子位に陽来復とゝ又朔とゝ

きぞ　神代紀に段字分字を訓とゝ常とゝ大殿祭祝詞に中間とゝ

きさらぎ　未詳　○按紀に宣命に岐多天久悪奴又織奴とあり○綾紀

きさらめ　桓武紀に問賜ひきさらめ場べくとあり○按紀

きさらふ　鍛煉といふ移りきさらふとも焼場る事なれば多識編に精鉄

きさらひがねと訓とり新撰字鏡に鑼字をきさらひがね針字をきさらひがねと

きさめり　俱に考得ず或ハ治をきさめりとも

きさらひ　新撰字鏡に腊をきさみ倭名抄に脯腊をきさらひと

色し脯ハ乾雞腊ハ乾肉とんきさらひ主計式に鯛腊きさらひ今按腊に

木鯛ひらかうと誤る家へし又主計式に鮫膴きさらひ膴もきさらひと

訓とり今義解に腊ハ金干物也とあり

きさたし　日本紀に堅塩をきさたし倭名鈔に俗呼黒塩為堅塩と

見ゆ可考　○按ずるに於保佐佐ずるも今も泡盛

北海道出れ時国浦の漁人干鮑に塩を添て饗を此堅塩ときさたし

と呼ぶ○鍛字をきさたしと訓る義因しかるに此堅塩をきさたし

きさたし　神代紀に汙縹をきさたしと直指物に無殷比義とあり

なきさたしとあり○綾紀宣命に岐多天久悪奴又織奴とあり○綾紀

物に絹をきさたしとあり○按ずるに奇比を云

きさらはかた　北方を手り搢紳比室を称せり元位治所比位り北方

陰也故に女を少方といふ北堂を北政所比称ふ也

きさらはまり　少比条也土比加義比時比条をいふ○小比条ハ二

月八月之釋奠ハ二仲也年中行事故實考に菅家を小比条に祀ると

孫世々を紹て学曹神なるを聖廟比号を勅祭ふ

きさら坂　天下に名く菅神比縁を条る紀奠比迷風なるべしとあり

後文粹に昌泰右僕射重祖跡以崇霊祠といふハ紀綱の吉祥院村

堂西に聖廟ありと二水記に大永二年菅大納言長者拝堂先詣吉祥

院後詣北野社とあり○大将軍宗尊親王比ふり

きさらはま　少比条比雲比ふる海なる事をいふ分ハ

将軍宗尊をかくいふ海なるかくいふ

△きさらはり　几帳をいふ几を帳比ふり新猿楽記に八基帳とあり

枕几帳なども几帳なるべし○神よりあたへて法也とて神几帳とも
○細ふる物に稜を消を几帳面とも
ぎうやう　毬打に訛音也とも十節録に黄帝取蚩尤頭毬之今
毬杖是なるべしとも馬上に業して武事を習ひ也唐に代弊
擊毬と訛て打毬に同し今西俗兒童に弄ふあるぎうくぎうも
うみし実なり片木を丸めくるし椎に形たる杖を美観と
なす雪ふりて毬を毬杖に変風なるべしとも事なり
手水に物絡を毬丁に物をとる神物に幸に始めを毬杖を
打球をもて毬をとるとつくるなりとも○倍従に たぎうらやうも
しうりやう
ぎうらやう　今昔物語に蕃人馬司に乗て吉祥
を尻をぶるをたてとなる壁書に書紀にもめぶ吉祥に作て
なるべしめぶは馬部也禁秘抄に内侍に物絡をめぶを仕ふと云
も馬部吉祥也或は給丁をかく呼ふるもいて従に物絡に人に

物をあしらふる部丁とも云也○吉祥草は茅とも祭神
に異に用ふる名とも本草に吉祥草は観音蘭也
△きづな　倭名抄に攣又縁をもめりおなじく牽綱の義に紲も同
今世畜家の本綱なり山椒の本をもて作るなり
代用とも涅槃経に枷をもて見に○馬に乗は騎綱に懸綱也とも
きつく　築をもめり杵衝に築に出雲杵築社も同に風土記に穂米
をつきもて又所造天下大神之宮将奉與諸皇神等參集宮
處杵築故云付とも祝詞式神賀詞に八百丹杵築宮とも古事
記に所なやはうしいをづきに名をもめり
きつぶ　何にてもつぶるは給符に音なるべし二代実録に
給籤符とも明史に給信符勘合とも
きつね　狐とも云なるは狐物絡に狐なるべしとも物絡
のはきつねもあるべしとも事なり又万葉集に狐なるべしとも
とも云けつとも云なり霊異記に寝ぬ鶴を狐なるべしとも

狐うゝ〜こゝ黄也つハ助辭狐ハ猫の略なるべし○俗ハ狐を野干と云佛
經ハ射干とかゝて狐こゝ是まり字彙ハ狐同野犬似狐而小出胡地と
いゝり○源氏ハこゝ狐のまみとゝ也ハ文集ハ狐隱蘭菊叢と云ゝ
○大和添上郡眉間寺ハ西北ハ七足狐と云あり聖武天皇母公ハ
陵の地ハして立石ハ狐杖をつき踊り形を造りて七狐ありしと四人ハ
谷ハ落て破碎し三狐を存ずと云ゝ所ハ絶せり○城ハ繁茂ハ
して忽ちなす父維茂覓めて切ハ四狐ハ夢ハ狐塚ハ行
事を繼ハ○狐火ハ其口氣を吐と云或ハ擊尾出火と也
こゝ火まく鄉と云ゝ鬼燐也○南海ハ四國及對馬五嶋ハ狐あり
北夢瑣言ハ江南無野狐こゝ云ゝ○狐ハ虎の威をかりと云ゝ文選ハ
鼠憑社貴狐藉虎威こゝ云ゝ○狐を稲荷乃神使と云ゝ俗ハ
記ハ宇賀御魂神亦名專女三狐神こゝ云ゝ二狐ハ御饌津ハ
△こゝ云ゝ鄙俗ハ狐を專ハ祀ハ事天下風をなせり
朝野僉載ハ初唐時百姓多事狐神時有諺曰無狐魅不成村こゝ云ゝ

こゝ嗚呼愚なるかな○佛家ハ陀祇尼天ハ別号を白晨狐王菩薩と稱を
世ハ稲荷ハ神体と云ゝ形像是也白狐ハ事さぐじ又たうかハ源ハ
こゝ日本紀ハ也こゝ又黒狐ハ續日本紀ハ也こゝ尾ハ白錢文ハ
ふもこゝ○狐ハ化ハ事文類聚ハ將為庭必戴髑髏拜北斗髑髏
不墜則化為人矣こゝ云ゝ○狐ハ人ハ喰つく事徒然ハ二事を云せり○
俗ハ狐ハ事ハ危き事ハ狐こゝ云ゝ田樂記ハ蓋靈狐之所
為也こゝ云ゝ○總州漁人ハ家ハ牝狐ハ狐こゝ云ゝ
子皆狐首狗身ありしこゝ○淫婦を古狐こゝ云ゝ玄中記ハ千載之狐
為淫婦百歲之狐為美女こゝ云ゝ事ハ事
もこゝ云ゝ狐ハ化ハ古こゝ云ゝ
文集ハ古塚野狐妖且老化為婦人顔色好見者十人八九迷こゝ云ゝ
○玄中記ハ百歲之狐為神巫能知千里外こゝ云ゝ筑後久留米ハ城ハ
靈狐ハ祟ハ觸病患ハ吉凶を卜し後ハ密ハ安否を問ひ其餘禍福を
諭を掌を指ハ如ハ婦女となり男子ハ合交し魂ハ丈夫となり

如人と交接とゝ云て世俗の物語に多し或は形を化し經綸を説
或は仕を露し大古に語る此類は孝子を扶へがゝ敬神尊と云
書よみ也し弓張月に霊狐と云て敬神の事を説
めり〇又伽藍記に狐のをけて人の髪を截りし事一
百三十人なりしと記せり〇年中行事に又備前岡山に年ごとに
〇狐川は山城山城に狐崎は摂河安倍川辺に〇三野狐直
此事霊異記に見たり〇和名抄に播磨の川に牝狐
及子を大啗殺せり〇牡狐六狐と云り如をそびえ昼は隠り
暮時まで啗合て遂に敵に殺る也
〇切付と書り馬轡也と云り虎豹葦鹿毛と伝に制
禁にあり〇拾芥抄に云て云り〇摂州淀川に河曲
郡川原田村に云り今猶云伝へ風俗と呼り大双紙に
ちきつ伝へて云り
〇狐魅と云物を魂人に託せる也〇宇治に大蠱有て狐魅
イヌカミ

なりと云西土に交廣地に蠱有て狐と蠱とを
家に飼せるなるへし
△きて
△きど　柵門也或は日本紀に所見
造りかもと云り蔵本にもいふなり〇京
△きのこ　半錢と云錢八往一寸半と云なり
△きよ
△きぬ　絹と云あり音を訓とるなり海人藻芥に絹有二四種
謂長絹平絹細絹鹿絹と云て百錬鈔に六丈絹に云て類聚雑要に國
絹面絹凡絹八丈絹に云て所見後に見ける〇衣と云
絹八衣に見えたる物也〇祖と衣と云
に八祖と云衣冠に下に八衣と稱と云
知へと云云物也と云り〇法隆寺
たらと云物

いとをもめて糸〜紀ヨハウハ和ケウ氏とかへしてそぬふ
といふ義なり○きぬは生絹也神ぎぬは練絹と生日絹熟日練とんてう
こぬがさ　日本紀倭名抄に蓋とあり祝詞に衣笠とあり又華蓋と
あり錦蓋なとともいふ○葬儀式に用らし○衣笠山は山城葛野
郡龍安寺村の小ゆり續紀に養老元年遣唐使祠神祇於蓋山之
南とあり○衣笠の城は相模に城ありし三浦義明此城なり
こぬぐ　たのうきぬくこめくしけるいふ合歓の衾と離と
各く自くしけ衾とをてふるくこと○こめ〜山の弟をとるとよ
めるは衣不着ける義なり
きぬけさ　倭名抄に裾とあり又ふるすそとあり元来下裳
乃尻そて下裳とかいふ事ハ官位よりて長短あり又代くけ異
なりこれより我邦は西土に比をるに凡て裾を長〜隋煬帝作長裾十
二破名仙裾といふなり
△きぬ　新撰字鏡に杵とあり多くいふことをかりこめるに杵つけ

字あへ〜杵根の字神代紀にみえたり○祢宜とかくいふ祈会の
音とをとて名づるなるへし神社とかくは祈月の義なり○こもの字は月
ごとにもけることをあらハ注也後撰弘岐屋社社頭を賞して杵を搗
とあるなり○杵淵の姓は室衰記にあり
△きのふ　萬葉集にあり昨日とかく前日今日
とけふとあるなり○こそ　こそ〜孟子に昔者とあり
昨日は家疇昔之夜は昨夜也新拾遺等に
わかれ月日をふ月陽とそ人は〜なるこん
きれる　松茸紙にあり木斷也字韓文にも滑拙と訓ぶへし
○法師茸に思ひんとを法師なり〜こんこそ公苦〜
△こんこと　ひこんこんこそ
ひこんこんこそ
可以陪王公而下受辱於里閭不敢校者伎與僧耳とあるに似り
きけえきけと　甲乙とあり木は兄木の弟は乙木十幹は五行に分てる

ものなり八丙丁等は訓義もなりたちへ契〜○十干は非情を取て天氣に属し十二支は活を立て地形に属を天干と地支と和加へて六十甲子とあり

△きば　牙をいふ截歯は象之信に糸きりばこと俗にいふ杉くびをきりてのこす○本邦は象もなし

△きはむ　究極をいふ万葉集延嘉或はきはみともあり際をきはかゝる処なるへしきはまるもいふまるる反也く彩繪宮殿は垠を八方はきはまりとあり○詩經に谷字をあとあり極と音同しきはて假借なり進退惟谷とあり○刀劍掛軸をきはめとあり真贋を推究めるなり処なり

△きび　黍を訓とり黄實なりとあり○保延三年に天きびと西せしきはりを文正しとあり万葉に○倭名抄に丹黍なり

きみ粔黍なりきみ秋きみのもちと訓とり○吉備は黍乃ちなり紀に吉備なりとあり今兼中後は三黍を訓とり和名抄に

きびはみちはもちきびはみちはみちはきびはみちはみちはきびはみちはみちは

江志賀なり

△きみ　神代紀に君主公侯王皇代紀に元首なりとあり　古事記に夫子もあり諸冊に凡君を合せて君也とあり　令義解に君謂天子也とあり　周礼に諸侯とあり　大夫まても君と稱すとして倭訓も通してきみなり　儀礼に天子諸侯及卿大夫有地者皆曰君とあり　又かきみ通ず　万葉集にきみ　紀に神なりまたかみなり　武ハ君也　唐音也　○中右記に大臣之孫子謂之君とあり　○拾遺に童名に君を付て呼を白虎通に后者君也とあり　○右卑相通して互にきみとかよへり　○古へ官卑相通して互にきみと呼し　官位なりとも君を付るなり　今ハ官位あるへき事に用ひ　女をきみと稱せしも事繁に及ぶなり　○光孝天皇紀に親王に沙汰に及ぶ　○若菜集に若菜摘こしよ君　○杜預傳に帝從百僚臨會拳觴屬預曰非君此橋不成と　○人を呼て仁とかきみ　むれ例梵書にかきみ　○琉球に俗神を敬て神も亦霊也其神をきんまきと稱す君真物に象て神がかりをなす女を君（キミ）と　神に者三十二人皆酋長なり女にして其長を聞浦君（キミ）とかきみなり　○詩文に今も貴賤に別なし　又地名にかきみ　李白に思君不見下渝洲とあり　杜鵑をさきたるなり　何應龍に君若思歸可便歸とあり　○俗に　○白樂天に詩に林下幽閑氣味深とかきみ

△きん　梅村載筆に秀次関白に附縁百書に泛せられ五山に俗衆にて吟味し　故事多かりに足利に元信とひし　船字をきみとよむと云　○琴に面目を多ひるとかきみ　○記に顔真卿韻海鏡源に世本曰黄帝二臣共鼓貨狄見窫木浮而為船以避蚩尤難故船字从舟从公所謂有舟公之義舟音錢進也从辷在舟上とかきみ

△きん　和名抄に琴に音也きん　松茸紙にあつげ

△なるとにんにんにふるとゆう○源氏に在五が物語に琴教ふる所
とて伊勢物語にもとうしにて可笑けるとんそそふ様にもあり伊勢
物語に古くハ琴の事もなく狭衣に八ちの日記にもとうしに
こハ源氏にうけてもとうしに別に見えたるにふるとよハうし○源氏にんいぞ
うのもとべにつるハ琴ハ五箇の調にて一に搔手二に片垂三に水宇瓶
四に蒼海波五に雁鳴調と河海にみえたり○猫家にハ磬乃唐音
うちなりしと例せり○俗に法嚢をこんとゝふ
きんがい　絹垣とゝり古事記に絶垣とゝて儀式帳に生絶衣垣とも
ゝゆ伊勢物語に遷坐に附に用るとあり○錦鞋とも倭名鈔に
こゆ或ハ錦蓋とも音ゆとゝり
きんぐち　公等也日本紀に君王とも王宗ともあり今清華に子
息を称とゝて義孫を公達とも
きんちやう　金打に音かゝりを音とゝて盟約に附男
子ハ刀をうち合女子ハ鏡をうち合とゝり又かの物にんゝり

△きもの　本月に衣本注にまきとゝ物にて膝理とも
と織密とゝ
△きもを　肝をいふ氣に元なるべし又木之精也とゝ木元に象あるべ
○信長公戦士に武男を感して肝に毛生とゝ長とゝる事なり
蒲生侯乃家臣に公事にうし新著聞集にんゝり
きもむしう　萬葉集に肝向心を推てこんゝり西土に心肝を對とゝる例と
きもつぶす　源氏に肝を潰すに又肝を消とも法苑珠林
小慴然喪膽とゝ驚魂に文選に[illegible]に俗に
肝つぶす事をおやくゝとゝふ急に呼り
△きもや　思ひきもやハ[illegible]ひとりや思ハざりしとよ
きもも紀にしるりやいかゝと紀に物せりとゝ
きやら　伽羅と書り沈香に奇南香に南或ハ楠に作る
[illegible]みとゝに似たる木に深山幽谷に自然に枯朽に浮とゝる物と
ゝ餘木に伐て土に埋て心に用るとゝ交趾に上品とゝ暹羅に中

品々〜白城ゝゝて下品ゝ沉太泥ハ能水ゝ沈めゝも最下品也ゝゝ又ま
なごんまるゝゝゝふハ番香ゝゝふ也真名班ゝゝ禪家ゝ悪沈ゝ速香ゝゝ
ひ好香ゝ鷓鴣班ゝゝふゝ〜埃嚢抄ゝゝゝ

[illegible]白きいとゞ雪をあざけりて清潔なれば
石清水の流れ今日の立居の流れつゞきて清流を汲て茶の田延年の
ゆゑ今も除服の時はとゝかく清くして二見ハ雜會よりて石清水の
あるゆゑ後除の日すゝ清潔ハ清潔よりとゝかるゝ後撰集よ
人をかるゝ[illegible]ゝて清きなりてすゝぎん
催馬樂よりいとはれ清きゝ紀のぎさゝゝるゝ仁和大嘗會の
所よりいとはれ海はるゝゝみゝゝ万葉集よ對馬行海ゝ浦まそ
ゝける清きゝ紀さゝゝみゝゝ万葉集よ
芳野川ゝ清き河原ゝ所ゝ清きゝ万葉集よ
きゝ　清きゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

[illegible]

○八雲沸抄ニ霧ハ霞ト[illegible]○桐ハ[illegible]
伐て却て宗[illegible]ハ[illegible]新撰字鏡ニ拔ヲ[illegible]
[illegible]ハ刺桐也○緋ぎりハ顔桐也あぶらぎり
[illegible]信濃牧十六ヶ所ノ桐原[illegible]
[illegible]只殖原牧ヶ所拾芥抄ニ埴原牧ニ作る○錐ハ木ニ入ノ[illegible]鑽ハ[illegible]
ぎり也圓鑽[illegible]ひらぎりハ扁鑽也新撰字鏡ニ鋒也[illegible]三稜錐
[illegible]ぎりく折鑽ハ四方錐也又壺ぎりと丸ぎりとも云圓鑿ヶ
舞鑽ト字ハ日用雜字ニ[illegible]○一節二節とひとこと[illegible]
[illegible]ト類書纂要ニ白日剪破人
衣袖竈其財云[illegible]絡[illegible]○限[illegible]ト略[illegible]○かくこと
きりとの云蛮語也[illegible]十馬切[illegible]蛮人ト形[illegible]釋迦ト十と
称する云彼土ト祢形[illegible]
きりじ　梵ニ紇哩字ト祢ト[illegible]又[illegible]梵字ヲ阿弥陀経ト種

[illegible]又霧郎[illegible]
[illegible]ト祢ト吃哩字ト[illegible]十一面神呪経ニ十一面中
祢ト霧ト梵語ト[illegible]字ニ[illegible]十一面[illegible]
頂上佛面即阿弥陀也彼佛種子梵書紇哩字有禳災除疫之功能[illegible]
瑜祇経ニ如秋八月霧微細清浄光常往此等持是名微細定[illegible]
○涅槃経悉談章ニ初會吃利三會吃利[illegible]ハ[illegible]ニ喚ト[illegible]
喚声ト[illegible]
きりぬき　紇哩ニ神祇官頒切麻ト[illegible]ハ拾き等ニ[illegible]
[illegible]
△きるぶ　斬字切字ホ皆刃ヲ[illegible]
も錦も誅も伐も[illegible]○服字著字ホハ[illegible]霊異記ニ別
[illegible]○火ヲ[illegible]ハ鑽字ヲ[illegible]錐ヲ[illegible]今も神宮ニハ錐火
ヲ用ヰて神饌ヲ調ル[illegible]新撰字鏡ニ鑽ヲ火木ヲ[illegible]

837
34
48

△きれ　材木絹布なとにいとり断字なるへし莊子に百年之木破而為犧樽青黄而文之其断在溝中とあり木断を木段とも書り

△さろく　文選に滈々瀚汗なとと訓せりさらく共に清に用ゐる

ぎろく　もるとゝのもまぎらはしき義し

△さらさ　本綿共に布名なれども今世に行はるゝ如き織法西土に大唐にはいつ頃より始て織を作へ朝鮮にハ元寧の種を伝へり象邦に天正年綿花始て渡来し万民日用の要物なり紅毛語かとんにハ綿をかとんの草なりと云り○蕃と蝶とのひ蕃と桃とのひ蕃とを共に本草にも桃蕃と云り○凡そ本綿と絮とを共に家内より上古我邦にゆてゝ云る是一種彼邦にて杜仲の一名に云へり是一種蕃名にもあんやと絮是一種今共綿花布是一種と年一種共本草にいはるさる七八月に及桃に蕃共ゆく實にて長して小也又一種にはりを実丸くて小也綿花に絮を肥後に安和共物に紺色共綿でさらさ一年

みて絶ふさ○類聚國史延暦十八年共に天竺人共をさらさしたる綿種を植ゑ殖さんことを願ふ也今共綿なへし新撰字鏡に

安波乃知和多乃知わたぬ韓人共に多毛し綿共にたるへしをさらさ

大学衍義補に自古中國所以為衣者絲麻葛褐四者而已宋元之間始傳木綿入中國云々○本綿共に三浦氏の説に奥列さらさ共に桃蕃なるを化石共にからさらさの又必しも久をを強ちて化石共理も観に足り奥列さて堂を建んとて第一材木を求く石に化しなるも亦新にへしす

△きわる　本長也さわる雪ひとしきり日本紀のあるきわる共とも

△さる

△さお

和訓栞前編七

国立国会図書館　タイトル『和訓栞』　請求記号 837-48

ガラス使用